

## 主要展示品解説

とうしょうぐうえんぎえまき  
東照宮縁起絵巻

5巻

大阪城天守閣蔵

第1巻 36.0×1053.0cm

第2巻 36.0×2445.0cm

第3巻 36.0×1515.0cm

第4巻 36.1×1969.1cm

第5巻 36.0×1237.0cm

徳川家康は死後、遺言にもとづき神格化された。朝廷が名づけた彼の神号は、「東照大権現<sup>とうしょうだいこんげん</sup>」。その神霊を祭る東照社が死の翌年、元和3年（1617）に日光に創建された。正保2年（1645）には朝廷から「宮」号をゆるされ、東照宮と呼ばれることになった。

東照宮縁起絵巻は家康一代の事跡と、没後に東照宮が成立する経緯などをあらわしたもの。日光東照宮所蔵の原本は寛永17年（1640）、三代将軍徳川家光の命により完成した。絵は狩野探幽の筆<sup>ことば</sup>、詞書は家康や家光に重用された天台僧の南光坊天海の作文になる。

家康の十男で紀州徳川家の祖となった頼宣は、和歌山に紀州東照宮を創設。さらに住吉如慶<sup>すみよしじょけい</sup>に命じて、日光東照宮の原本を参考に東照宮縁起絵巻を描かせた。正保3年（1646）に仕上がったその絵巻は紀州東照宮に奉納されたが、本品は江戸時代後期、紀州藩主徳川治宝<sup>はるとみ</sup>の命で作成され、同家に伝来した優品である。幕府御用絵師の住吉広尚<sup>ひろなお</sup>が第一巻から四巻、その弟の広定が第五巻を担当して、如慶の絵を模写。文政8年（1825）に完成させた。



## 誕生

### 【東照宮縁起絵巻 第一巻より】

家康は天文 11 年（1542）12 月 26 日、岡崎城で生まれた。父の松平広忠は 17 歳、母のお大は 15 歳で、二人の結婚の翌年だった。

画面の右手でおこなわれているのは出産時に妖魔を退散させる「<sup>ひきめ</sup>藁目の儀式」。先端の器具が鋭い音を発する藁目の矢を広忠の家臣が射ようとしている。左手では広忠が赤ん坊と対面している。喜びにあふれる松平家。

しかし、家族の幸福の期間は長くなかった。このあとお大の実家の水野家が尾張の織田信秀に与同したため、広忠は妻を離縁してしまう。織田氏と駿河の今川義元との対立が激化するなか、広忠は今川氏の意向を気にせざるをえない立場にあった。竹千代と名づけられた家康は、わずか 3 歳で実母と別れた。



いんじ  
印地—石合戦の勝敗予想を的中

【東照宮縁起絵巻 第一巻より】

二手にわかれて石を投げあい、勝敗をあらそう印地の風習。10歳のころこれを見物した家康は、「多勢側で見るのはいやだ。少人数のほうへ」と見物場所を移動。はたして合戦は、死にものぐるいの少人数側が勝利した、という逸話を描く。

松平広忠は駿河の今川義元への忠誠心を示すため、6歳の息子家康を人質として駿府へ送り出したが途中、縁者の裏切りにより、家康は敵方である尾張の織田信秀のもとへやられてしまった。2年後、今川・織田間の捕虜交換で家康は駿府へ移された。したがって10歳の家康は、駿府で人質生活を送っていた。その間、8歳のとき広忠は家臣に斬殺されていた。

駿府での人質時代は10年半も続いた。永禄3年（1560）、今川義元が桶狭間の戦いで織田信長に討たれたのち、家康は岡崎城に復帰する。その後は信長との同盟を深める。



## 関ヶ原—天下分け目の戦いに勝利

### 【東照宮縁起絵巻 第二巻より】

秀吉は死の直前、家康ら有力大名からなる五大老と、石田三成ら側近奉行で構成される五奉行の合議で豊臣政権を運営するしくみをととのえた。しかし豊臣の家臣団の派閥抗争とからみあいながら、五大老・五奉行体制も分裂。ついに慶長5年（1600）、関ヶ原合戦の火ぶたが切られた。画像は白旗のたなびく下、黒毛の馬にまたがり合戦を指揮する家康。

この戦いは、豊臣体制のもとでの主導権あらそいとして発生した。家康も豊臣政権の大老として、彼なりに豊臣秀頼を尊重していたから豊臣恩顧の大名たちを味方にできた。当時の秀頼は、絶対的な権威だった。しかし絵巻の詞書は、豊臣秀頼を「兵乱の本基<sup>ことばがき</sup>」（合戦の元凶）と記す。合戦後、家康が「深き御めぐみ」（恩恵）で秀頼を助命したと叙述する。合戦を「豊臣対徳川」の構図に位置づけ、歴史を改ざんしたのである。



## 大坂の陣—豊臣氏を滅ぼす

### 【東照宮縁起絵巻 第二巻より】

関ヶ原合戦後も天下人になりうる存在として、特別の権威をたもっていた豊臣秀頼。家康が老い秀頼が成長するにつれ、豊臣家が政権に再び咲く可能性が高まってくる。

慶長 19 年（1614）、73 歳になった家康はついに行動を起こした。豊臣家が再興した方広寺の鐘に「国家安康」という銘文がきざまれたのを見とがめ、わが名を引き裂き呪うものだとクレームをつけて挑発したのだ。ひと月半におよぶ籠城戦で大坂城をしめあげ、堀を埋めたてさせる条件で講和をむすんだ。翌年夏、豊臣家が開戦の準備をしていることを口実に、ふたたび大坂城を攻撃。秀頼を自害に追いこんだ。

画像は大坂夏の陣での家康。絵巻の詞書は、関ヶ原合戦時に助命された恩を忘れて反逆をくわだてた秀頼を非難。これを討ち国土の安穩を実現した家康を賛美する。



## 他界

### 【東照宮縁起絵巻 第三巻より】

家康の死因については、ごま油で揚げた鯛の天ぷらにあたったともいわれるが、真偽はさだかでない。鷹狩りのさなかに失神して、家臣が気付け薬のつもりで飲ませた家康携帯の薬が、じつは政敵を殺すために用いた毒薬で、「彼はみずから多数の人々を殺害した方法、すなわち毒薬によって悲惨な最期をとげた」とも当時のうわさ話としてささやかれた（オルファネール『日本キリシタン教会史』）。

発病から3ヶ月後、元和2年（1616）4月17日に駿府城内で生涯を閉じた。75歳だった。

家康は死の半月ほど前、自分の遺骸を駿河の久能山くのうざんに納めるべきこと、1周忌が過ぎたなら日光に小さな堂社を建てて自分を神に祭るべきことなどを遺言した。



## 法会—將軍家光の敬慕

### 【東照宮縁起絵巻 第四巻より】

家康の遺体はいったん駿河の久能山に葬られたのち、1 周忌にあわせて日光に移された。日光には東照社が造営され、そこに家康は「東照大権現」として祭られた。

祖父家康を敬慕した 3 代將軍家光は寛永 13 年（1636）の 21 回忌をめざして日光東照社の大造替工事に着手。ほとんどの社殿を新たに建設しなおした。めでたく工事は終わり、同年 4 月 17 日には盛大な祭礼、翌日には拝殿における経供養があった。この法要には家光もみずから参列した。

画像は拝殿での経供養の場面。建物の奥に家光が着座し、家康神格化を主導した天海が当時 101 歳にして導師をつとめている。

